

芥川龍之介の俳句

池松 孝子

俳句を専門としない文筆家の作る俳句を「文人俳句」という。今現在「文人」と言う言葉が一般に通用するかどうかわからないが。いわゆる俳句を専門とする俳人に比べて、明治から昭和にかけての「文人俳句」には深いものが感じられ私には好ましい。

夏目漱石もその一人であるが、芥川龍之介とは趣を異にする。漱石は正岡子規の指導を身近な所で受けていてある意味、写実派の専門の俳人と言ってもいいのかもしれない。一方、芥川は全くの独学だ。自分で「門外漢」といい「余技は発句」と言っている。芥川の句と漱石の句との違いはここからくるのかも。そこには芥川の個性が溢れている。ただ独学と言っても著書に『芭蕉雑記』や『枯野抄』があり、飯田蛇笏、虚子らとの交流もあった。加えて水原秋櫻子、山口青邨らの俳人と同年代であり影響は受けているだろうから一概に「独学」と言い切るには無理があるうか。

薄雲る水動かずよ芹の中

龍之介

これを読むと蕪村のこの句を思い起こす。

これきりに径こみち尽きたり芹の中

蕪村

どちらの句からも晩春の陽だまりが思い浮かぶ。時代的なものからくるのだろうか蕪村の句は大きくゆるやかだ。

更ふくる夜を上ぬるみけり泥鱈じゅうご汁

龍之介

この句からは泥鱈汁を食べていたら鍋の上の方から冷めていった。そのわびしさというか「しようもない」時間の経過のようなものが感じられる。

夏の夜や崩れて明けし冷やしもの

芭蕉

これはどうだろう。私の勘ぐりすぎだろうか。ただ宴で残ったものが冷えたのか。

かねてから私が龍之介の俳句の「いい」と感じているところは、視覚のセンスと聴覚のセンスによるものからくるのではないかと思っているのだが。その一つを挙げる。

木がらしや目刺にのこる海のいろ

龍之介

この句を誰か絵画で表現してくれないだろうかと思うことがある。あの高橋由一の「鮭」のように。その時、「鮭」にはない「木がらしの音」が聞こえるかも。